

灰色の午後

多 稲 子

灰色の午後

昭和35年 3 月20日 第1刷発行

著 者 さ 多 い 稲 子
¥ 290 発 行 者 野 間 省 一
印 刷 所 豊国印刷株式会社
(製本 大製)

発行所 東京都文京区 株 式 講 談 社
音羽町 3-19 会 社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

Ineko Suta 1960. PRINTED IN JAPAN

灰色の午後

木
彫
豊
福
知
徳

題
字
直
木
久
蓉

レイアウト

大晦日の夜、浅草へ出かけてくるというのも、連れ立っている三人の女たちの、三人とも何か自分をけしかけるような気分からであつた。おたがいがそれを認め合い、双方から持ち寄るような気分であつた。だから三人はわざとはしやいでいる。まだ宵の口の仲見世はやはり大晦日という気分で雑鬧していた。流れてゆく足音が、両側の店の明るい灯の中で、夜空に抜けてゆくように高かつた。今日は着物で黒びろうどのショールをかけ、白粉けの見える顔を正面に振り上げたような姿勢のまゝで吉本和歌は、持ち前の歯切れのよい口調で云つた。

「浅草へ来たんだから、やつぱり先ず観音様をおがまなきやいけないわね」

「おみくじをひこうなんて云い出すんじゃないの、いやよ」

美濃部数子は、いやよ、というのを笑いにふくめた。それは、どつちかがおみくじを引こうと云えば、自分も引いてみるぐらいの調子を合せた声音であつた。川辺折江はそれがおかしくて笑つた。折江にとつて和歌も数子も年長であつた。というばかりではなく、数子には

同じ仕事の上で、和歌に対しては医者である彼女に夫の惣吉の診察を頼んだりしている関係で、どちらをも尊重するものが折江にあつて、彼女はこんなとき黙つてたゞ笑つた。まつたく和歌や数子が観音さまにおまいりをし、おみくじなどと云い出し兼ねない今の気分がおかしいのであつた。仁王門をくぐると正面の高い本堂の前は、うす黄いろい明りの下に、参詣人の姿が黒く浮いて、広い階段は登り降りする人の波でひしめいていた。

「なんて大変な善男善女だろう。どうぞ来年はとおもつておがむんでしようね。一家安泰、商売繁昌」

「武運長久もあるだろうし、来年、まつたく自分たちがどうなるかわからないのが、今日の日本なんだから」

「ふうん。まつたくそうね」

和歌は数子に答えながら、そのくせどこか素つけなく云い捨てた。本堂へ登つてゆくと、線香の煙と無数にちろちろする燈明の光りで、仏壇の赤や金色がゆらぐように見え、その間のくらがりか幾重にも重なり合つていた。参詣人の男や女が肩をすれ合せながら、手を合せて臉をとじ、その瞬間一途に何か口の中でつぶやいている。

和歌は今度ははやし立てるように

「さ、私たちも、数子さんと折江さんの、文運長久を祈ろうじゃないの」

「文運長久、そりやいゝわ。武運長久、文運長久ね、うまいこと。文運長久を祈りましょうか」

折江は和歌の素早さに乗つて数子を見た。数子はおたがいに分かるふくみ笑いをした。

「ほんとに文運長久でも祈らなきや」

「あ、もひとりいる。惣吉さんがいてよ」

和歌は頬を風にでも吹かれるような表情をして堂の内部を見まわしながら云つた。折江は夫の惣吉の名を和歌から云い出されただけの受け方で軽く笑つた。数子はこれから自分の云い出すことがおかしいというように笑い声になつて云う。

「そりや惣吉さんの分もおがんでおかなきや、女たちだけ文運長久なんて複雑になつても困ることよ」

彼女たちはそんな戯れ言のうちにそれでも頭だけ下げて本堂をおりてきた。

仲見世へもどつてゆきながら三人はまだ、意識的に自分をはやし立てている気分を持ちつづけている。小間物屋のウィンドウのガラスの中に稲穂のかんざしを見つけると、和歌はそれを買おうとさえ云い出した。

「あゝ、とりこめのこのかんざしを買おうよ。珍しいものを久しぶりに見たな」

「稲穂のかんざし、それ、とりこめつていうんですか」

「そうよ、折江さん知らない？　稲穂に鳥がついてるでしょう。それで鳥米というの。正月の晴着のとき芸者が縁起かついでさすのよ。取り込めというこじつけね」

「なるほどそういうわけ。正月に芸者がこのかんざししてたのは知ってるけど、とり込めという意味は知らなかつたわ。初穂のめでたさぐらいにももつていたわ」

「取り込め／＼つていうのを頭にぶら／＼させてデモられちゃ、お客もかなわないだろうに」

数子がそう云うと和歌は頭を振るようにして

「なアに、お客は喜んでるのさ」

下町育ちだという和歌は、今でもそんな口調に云いのけて

「いゝじゃないの。これ買いましょう。あなたたち、原稿料を取り込め、取り込め」
ちよつと、と店員に呼びかけながらも店へはいつてゆく和歌のうしろで、数子は

「いやだ、吉本さん、ほんとに買うのよ」

「あのとりこめのかんざしをね、二本ちょうだい。いくら」

和歌は自分の錢いれから代金を出してそれを買うのだ。

「はい、おふたりに」

和歌の差し出す稲穂のかんざしを、折江は受け取つて、

「吉本さんは取り込め、いららないですね」

「そうよ、私は病院の給料、決まつているもの」

「そういうわけだわね」

「そうですよ。あなた方には悪いけどね」

「いやだ。私たちに悪いなんてこと、あつて？」

数子は、折江に云つた和歌の言葉に、冗談だとはおもうけどというように自分も笑いながら、わざとあきれたように強く云う。和歌はもう二人より一足先きに歩き出しながら

「ほんとだわね。あなたたちに悪いわけではない」

「当り前じゃないの、あなたはたくさんお給料をとつてちょうだい。あなたがお医者でわれわれ仲間が大助りよ。惣吉さんだつてあなたを頼りにしてゐるでしょう」

「そうなのよ。惣吉はあなたを主治医先生にしているもの」

「惣吉さん？」

和歌は数子と折江が惣吉の名を云うと、どこかでその名を聞いたことがあるとでもいうように、自分でも惣吉の名を口に出し、そのまゝ黙つた。が折江が惣吉の下駄を買つて行きたいと云い出したとき、和歌はまた、はしやぐように折江を振り返つた。

「あ、私たちみんなで惣さんの下駄をみて上げようじゃないの。光栄だとおもわなきゃ、これだけの女が三人で惣さんの下駄を見立てるなんて、惣吉さんは男みようにりますよ」

「惣吉さんの足音がいよ／＼高くなるわけだ」

数子も機嫌のよいときのよくひびく声で笑いをまじえながら相づちを打った。

折江は夫の名が和歌や数子の間でたび／＼云い出されるのを、自分たち夫婦の、彼女たちに親しいことなのだとおもっている。親しいだけではなくて、この二年ほど前から自分たち夫婦のどちらも我を主張した気分で摩擦を起し、それが今もつゞいている事情を彼女たちも知っている。それを知つての、外側から支えてくれるようなおもいやりでもあるのだと折江はおもつていた。それに数子と折江夫婦とのつき合ひは、この数年、一緒の団体と、非合法運動の組織との激しい活動を共にしてきて、その生活の内容も知り合つている間柄だ。それだけにその後の、組織を失つたおたがいの生活も、友情のうちにおたがいを寄せ合うようなつながりができている。惣吉と折江の夫婦生活がここへ来て複雑にもつれる日常の息づかいまで、数子にはくみ取つてもらえていると折江はおもっている。数子の方でもまた、夫の美濃部が検挙されて今度いつ帰つてくるという見とおしもないという生活だつたから、折江夫婦の家を今の自分の環境にいちばん近いとおもうところがあつて、それだけここを寄り合う場所にもしている。今年の春、惣吉が病氣した時、和歌を紹介したのも数子であつた。和歌は数子

の学校時代の友達だったからその後二人の立つていった道はちがつていながらも、今も遠慮がなくて、そのつながりで惣吉も折江も数子と一緒に、和歌に対しても医者と患者という間柄以上の友達づき合いに親しくなっていた。だから和歌も、折江と惣吉との複雑にもつれ合うものを知っていたのだ。折江の方では、彼女たちに惣吉の名がたび／＼云われていることも、自分への心づかいとして、数子や和歌への甘えのような感情で受け取っている。折江は自分ひとりで惣吉を抱え込む重さから手を抜くように、和歌たちに対して惣吉をもたせかけでもするようなところさえあつた。折江はそれをはつきり意識しないまゝ、惣吉の名が和歌たちに云われるとき、自分もまるで和歌たちと同じ立場のようになつてさえた。そうすること自分だけが三人の中で夫婦そろつているということをはずしたようになつて、女同士の雰囲気におもねつてもいた。

惣吉の下駄を買うと、和歌は下駄屋の店を出た隣りのウィンドウに瀬戸物をのぞき込んだ。

「あたし、惣吉さんのお年玉に、あの人の湯のみを買つて上げようかな。どう？　折江さん」

「買つて下さるの」

「惣吉さん、こんなものの好みうるさい？」

数子がそれを受けとつて

「折江さんの方が茶碗なんか贅沢なのよ。米が無くても茶碗だけ上等のもの持つてたりするんだから」

「あらそう。じゃ買おうよ。あなただつて亭主がいゝ湯のみでお茶をのむのいゝ氣持でしよう」

「私の買う上等なんて高が知れてますよ」

「ふん、これだろう」

「どれ／＼私も見立てて上げる」

数子も云い出して瀬戸物屋の店へはいつていつた。三人は惣吉の湯のみに、がや／＼とあれこれ云い、和歌は清水焼のひとつを買つた。

「惣吉さんだけじゃ折江さんに悪いわね」

「いゝですよ。私はあるの」

「じゃ、いゝにしときなさい」

「おみやげがそろつたじやないの。下駄と湯のみと。まつたく亭主はいゝもんだ。女房がだかけてくれば亭主のものだけ買つてくんだから」

「そうでもないけど」

「ま、こんなとき惣吉さん喜ばしときなさい、それで折江さんの気が休まるんだから。普段、亭主の世話だけしていられる女房じやないからね」

数子は折江の肩を叩くように云った。折江は結んだまゝの唇に微かな笑いを浮べ、惣吉のこの頃ずうつと重い表情を心においた。この頃の惣吉は、折江のみやげに弾んでくるような容易さではなかつた。彼はめつたに笑い顔も折江の前に見せなくなつていた。大晦日の今日も、朝の食事をすまずと、近所に借りている自分の仕事部屋にそゝくさと出かけ、すぐ一度もどつてくると、丁度来合せた若い友達の伊原と、早速のようにどこかへ外出していた。大晦日だからわが家にいようなどという心づかいは、わざと折江に向かつて無視して見せるような素早い身体つきであつた。折江もまたそんな惣吉に何らかの妻らしい言葉をかけるでもなかつた。そのあとで数子と和歌が連れ立つてきたのをむかえ、浅草へ出た。

仲見世の一側うしろのこの通りでは寒い風が吹いて売り出しののぼりをはた／＼とはいた。角のレストランの壁によせて急ごしらえの幕を張つたしめかざりの店では、もう今夜になつてあまり客もないらしく、はつびをきた男が目の前の人足をよそに、土の上においた七輪の火にかぐみ込んでいた。レストランからは聞きなれたブルースが流れている。小きざみの急ぎ足の女、子供に今買った羽子板を持たせて連れている男、もう着かざつて連れ立つた若い女や男、両側に張り出した店の灯のうつる通りはあわたゞしく、それでいてどこか佻び

しく見えた。それは折江の気持の反射にちがいない。彼女は自分も惣吉もないわが家の頼りなさに、ふと気持が急ぎ立てられていた。先きへ帰つてゆくのは、やはり自分であるにちがいない。しかし折江はその心とはちがつたことを数子たちに云つていた。

「もう一度私のうちへいらつしやらないかしら。惣吉さんも帰つているかもしれませんよ」それは数子に対し、またひとりでアパートに暮らしている和歌に対する折江の誘いであつた。それは同時に折江の、家庭という空氣の稀薄になつているこの頃のわが家に、彼女たちを加えることで何かをまぎらそうとする無意識の誘いでもあつた。

「だつて、ここからじや、あなたのうちがいちばん遠いのよ。明けてからまた逢いましう」

数子がそう云つた。電車通りの忙しげな人の往来を前にして、三人ともちよつと目の前の空氣の外に立つた顔をしていた。和歌はさつきから何か自分の中に別のおもいがわいていて、それで不機嫌になつたというように、急に数子も折江も無視した苛ら／＼した調子で云つた。

「あゝ私も、早く帰んなきや。円タクがすぐつかまるかねえ、大晦日の晩なんて、運転手が威張つてるから厭さ」

すると折江は、自分がそれをしなければならぬような氣になつて、和歌の氣の立つのを

あやす表情で云つた。

「円タク、私が拾いましょうね」

2

こうして年が明けた。昭和十二年の春は、惣吉夫婦、数子、その他の友人たちにとつて、おたがいの友情で結びつきながらも、みんながそれ／＼わが身の中に立て籠もつて、そこで仕事をするしかない、と腰を据えていたときであつた。惣吉と折江の夫婦さえ、自分自分という固い殻を見せはじめていた。殊に惣吉の見せはじめたその固い殻は、折江に対して意識的なものであつた。惣吉は仕事部屋から歸つてきて、茶の間の火鉢の前で家族といつしよの夕方の食卓についたときでさえ、その場にいどむような顔をしていた。仕事部屋を別の家に持つたはじめの頃こそ、惣吉はその雰囲氣を新しくつくろうとするように折江を呼び、仕事の手伝いもさせたりしたのが、この頃ではそれもしなくなり、自分の仕事部屋にいるかとおもうと、そこからもどこかへ出かけてゆき、寝る時間も、わが家の折江のそばには歸らないことが多かつた。

今夜もまた惣吉は歸つて来なかつた。折江は以前惣吉の机のおいてあつた場所に自分の机をすえてその前に坐つていた。惣吉は今夜も自分の仕事部屋からもどつて来ないつもりであ

ろうか。惣吉のこの頃わが家へもどらないことの多いことは、自分の生活は自分の仕事部屋でと、歯を喰いしばっているようなものだ。折江は彼の心の中をそんたくした。

その歯を喰いしばった惣吉のおもいは、今こそ自分でやつてゆくしかないし、自分の力を出し切るしかない、と不安を押し切りながらの意欲でもあらう。しかしそれはまたあきらかに折江に対しても事更らに歯を喰いしばっているものがあつた。それが折江に暗い力で反射されていた。

惣吉が外に仕事部屋を持つたのは、折江の仕事の生活と打つかり合つて、その上でのようやくおたがいのひとつの活路のように実行されたことであつた。だからこそその生活はおたがいに温め合わねばならなかつた。しかし惣吉はこの頃意識的に自分だけに籠もろうとして見えた。折江との夫婦の生活からさえ彼は遠ざかろうとしているように見えた。折江はそれを、惣吉の自分の仕事に立てこもろうとする身構えなのでもあらうとおもいながら、その仕打ちの無理な力みたいなのが不安であつた。惣吉はやはり自分の満たされぬものを押えて、強いて折江に背を向けようとしてしていると感じられる。惣吉はやはり別の家に仕事部屋を持つたということで、折江に反抗をしているように見えた。

そんなわけではなかつたじやないか、と、折江はおもい、この頃の惣吉の変り方に何か解けぬものがあつた。惣吉の性格から、そのような無理をするということが合わないのだ。自